

# 智顗の戒律思想 —十善を中心として—

## Zhiyi's Concept of The Precepts: Focusing on Ten Good Deeds

文学研究科人文学専攻 博士前期課程修了

大 津 健 一

Ken'ichi Ohtsu

### I. 問題の所在

智顗（538-597）は、一心三觀の止觀行の準備段階を二十五方便という実践項目に整理し、『釈禪波羅蜜次第法門』（以下、『次第禪門』）や『天台小止觀』、『摩訶止觀』において詳説した。その第一に挙げたのが「持戒清淨」である。智顗は、修行者が戒を清らかにたもち、律を守ることが禪定や止觀の前提であると考え<sup>1</sup>、戒律を修行の根本として重んじた<sup>2</sup>。そして修行実践の体系において、戒を定・慧と一体のものと関係づけている<sup>3</sup>。

一方、諸著作には、「思想の発展」では説明しづらい、相反するような内容が見られる。とくに戒律についてまとまった形で論じる『菩薩戒義疏』は、内容と形式の両面で他の撰述との差異があり、『国清百録』などの史伝に言及がなく、近年は、智顗の死後に成立した『摩訶止觀』、『妙法蓮華經玄義』（以下、『法華玄義』）、『妙法蓮華經文句』（以下、『法華文句』）の三大部などとの本文的一致が指摘され<sup>4</sup>、改めて真撰性に疑問が呈されている<sup>5</sup>。

よって、智顗の戒律思想を考察するに当たっては、『菩薩戒義疏』を中心に据えるのは避け、他の諸著作を通しての検討が求められる。前期時代と後期時代の間には独自の思想の大成があるため<sup>6</sup>、本論文では著作間の異同に着目して思想の発展を論じたい。

<sup>1</sup> 『次第禪門』巻第一之下、「一正釈諸禪次第義者、行人從初持戒清淨、厭患欲界、繫念修習阿那波那、入欲界定、依欲界定、得未到地。如是依未到地、次第獲得初禪乃至四禪。是名内色界定。」（T46, p. 480, a20-23）や、『法華玄義』巻第四上、「諸禪中修六度者……若不持戒、禪定不發。又入禪時、雜念不起、任運無惡。是尸。」（T33, p. 720, b16-19）を参照。

<sup>2</sup> 佐藤達玄 [1986:412] は、戒によって生活を浄化して禪定を修することが出家の基本であるという考え方は慧思から継承したと指摘し、安藤俊雄 [1968:210] は「智顗が当時の墮落した教団の肅正のために持戒を特に重視した」と述べる。

<sup>3</sup> 小寺文顯 [1965]、福島光哉 [1980]。

<sup>4</sup> 村上明也 [2009] [2017]。

<sup>5</sup> 早くは島地大等 [1976] が諸著作との差異を指摘し、佐藤哲英 [1979] が智顗の撰述という事実に疑義を呈した。

<sup>6</sup> 佐藤哲英 [1979] は「天台大師の思想的生涯は、瓦官寺講説や天台隱棲などの前期時代と、三大部講説以後の後期時代とに大きく二分され、その思想は後期時代にいたって飛躍的進展を示して、四教五時や三諦三觀などのいわゆる天台教学は、三大部講説時代にいたって大成されたものである」（「再刊にあたりて」5頁）と述べる。

考察の切り口として、本論文では「十善」<sup>7</sup>に焦点を合わせる。なぜなら十善は、小乗でも大乘でも戒や実践規範として位置づけられているが、意義づけ方が異なるため、思想を探る一つの目安になると考えるからである。先行研究<sup>8</sup>において十善に絞ったものはなく、また近年、日本天台の戒律を分析するために智顗の十善戒を検討する論考<sup>9</sup>があるため、こうした研究手法には一定の妥当性があると思われる。

十善は、仏教以前のバラモン教などから影響を受けたもので<sup>10</sup>、阿含經典では主に、善の行いによって楽の果報を受ける業道として説かれている<sup>11</sup>。また、善悪の基準を示す徳目でもあった十善は、在家の五戒と並び称されて<sup>12</sup>、同等の実践規範と見なされた。一方、六波羅蜜を在家・出家両方の菩薩の実践として位置づけた大乘仏教では、第二の尸羅（持戒）波羅蜜の内容として十善を立て<sup>13</sup>、初期大乘經典から菩薩の戒として受容した<sup>14</sup>。小乗戒が防ぐのは身業と口業の過非であるのに対し、大乘戒は身口意にわたる<sup>15</sup>。そうした大乘戒の象徴が、身口意を収める十善にあると言えよう。

また、大乘の戒は本性に直結して論じられることが特徴で<sup>16</sup>、仏教の出現以前から存在し、犯す行為それ自体が根本的な罪惡となる「性戒」<sup>17</sup>と関連がある。性戒とは具体的には、出家の四重禁（四波羅夷）に当たる不殺生・不偷盜・不姪・不妄語を指すことが多い<sup>18</sup>。類似の概念として、『大智度論』では、尸羅を十善とする『摩訶般若波羅蜜經』（以下、『大品般若經』）の文を注釈して、釈尊が定めた戒を客戒とし、仏教以前からある十善を「旧戒」と呼んだ<sup>19</sup>。

こうした十善の特徴について、智顗の諸著作はどのように受容しているのかを明らかにして、戒律思想の一端を論じたい。なお、扱う著作は佐藤哲英〔1979〕の研究に基づき、前期著作は『次第禪門』、

<sup>7</sup> 不殺生・不偷盜・不邪姪の身業三つ、不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語の口業四つ、不貪欲・不瞋恚・不邪見の意業三つ。表記には若干の差異が見られる。

<sup>8</sup> 小寺〔1965〕、由木義文〔1973〕、利根川浩行〔1974〕、平川彰〔1976〕〔1997〕、福島〔1980〕〔1981〕、佐藤達玄〔1986〕、藤尾和世〔1995〕、前田崇〔1995〕、勝野隆広〔2000〕、阿純章〔2004a〕〔2004b〕などがある。

<sup>9</sup> 張堂興昭〔2012〕〔2014〕〔2016a〕〔2016b〕の一連の論考がある。

<sup>10</sup> 中村元〔1971:9-10〕。

<sup>11</sup> 『長阿含經』卷第六、「若利利種中有不殺者、有不盜、不姪、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不慳貪、不嫉妬、不邪見。婆羅門種、居士、首陀羅種亦皆如是、同修十善。夫行善法、必有善報、行清白行、必有白報。」(T01, p. 37, a17-21)、『雜阿含經』卷第三十七、「仏告婆羅門長者、謂離殺生乃至正見、十善業跡因縁故、身壞命終、得生天上。」(T02, p. 273, a4-6)を参照。

<sup>12</sup> 『増一阿含經』卷第十六、「若善男子善女人、欲求作声聞、縁覺、仏乗者、悉成其願。吾今成仏、由其持戒。五戒、十善、無願不獲。」(T02, p. 626, a21-23)を参照。

<sup>13</sup> 『大品般若經』卷第五、「云何名尸羅波羅蜜。須菩提、菩薩摩訶薩以應薩婆若心、自行十善道、亦教他行十善道。以無所得故。是名菩薩摩訶薩尸羅波羅蜜。」(T08, p. 250, a13-16)を参照。

<sup>14</sup> 平川〔1960〕〔1968〕。

<sup>15</sup> 土橋秀高〔1967:119〕。

<sup>16</sup> 土橋〔1967:119-120〕。

<sup>17</sup> 性重戒などとも表記する。また、性戒を犯した罪を性罪という。

<sup>18</sup> 『大般涅槃經』（南本）卷第十一、「有二種戒、一者性重戒、二者息世譏嫌戒。性重戒者、謂四禁也。」(T12, p. 674, b4-5)、『阿毘達磨俱舍論』卷第十一、「前四名戒分、從離殺生乃至離妄語、此四離性罪故。」(T29, p. 232, b29-c2)、『大乘義章』卷第十二、「次辨遮性、五中前四遠離性罪、後之一戒防禁遮惡。」(T44, p. 696, b21-22)などを参照。

<sup>19</sup> 『大智度論』卷第四十六、「十善道為旧戒、余律儀為客。復次、若仏出好世、則無此戒律。如釈迦文仏、雖在惡世、十二年中亦無此戒、以是故知是客。復次、有二種戒。有仏時或有或無。十善、有仏無仏常有。」(T25, p. 395, c8-12)を参照。

『法界次第初門』、後期は『維摩經』注釈書（『三觀義』、『四教義』および『維摩經玄疏』、『維摩經文疏』）と三大部を取り上げる。

## II. 前期時代

前期の代表的な著作である『次第禪門』<sup>20</sup>と合わせて、仏教の用語について解説する『法界次第初門』<sup>21</sup>を検討する。

慧思（515-577）の師匠である慧文（生没年不詳）が『大智度論』を重視し、その思想内容が慧思を通して智顗に伝わり、天台教学の根幹を作っている<sup>22</sup>。智顗は前期時代に、金陵の瓦官寺で『大智度論』の講義を行っており、著作にも同書が影響している<sup>23</sup>。『大智度論』は十善について、『大品般若經』における尸羅波羅蜜を解釈し、無量の戒を収める総相戒<sup>24</sup>であり、仏教以前からある旧戒<sup>25</sup>であると定めている。こうした『大智度論』の文と比較することで、智顗が『大智度論』から受容したものと、別で解釈したものとの対比が鮮明になるであろう。

### 1. 『次第禪門』

#### （1）有漏法・世間の善道

『次第禪門』巻第一之下では、煩惱を断じていない有漏の法として、十善および四禪・四無量心・四空定の十二門禪を示している<sup>26</sup>。この箇所より前では、禪を世間禪・出世間禪・出世間上上禪の三種に分け、十二門禪を世間禪に配しているため<sup>27</sup>、ここにおいても十善を世間における実践として見ていることになる。

<sup>20</sup> 佐藤哲英 [1979:49] は、前期の著作の中心は『次第禪門』であり、他は『次第禪門』の体系中に包括されると述べる。

<sup>21</sup> 佐藤 [1979:240] は、『法界次第初門』は『次第禪門』と文章の関連が認められ、かつ発展した内容もあるため、『次第禪門』の後、前期著作の中でも遅い時期に位置すると見る。

<sup>22</sup> 安藤 [1968:14-25]。

<sup>23</sup> 佐藤 [1979] は、「次第禪門は……龍樹の大智度論に負うところが多い」[115]と述べ、『法界次第初門』についても「智度論が本書にいかにより大きな影響を与えているかが能く知られる」[231]とする。

<sup>24</sup> 『大智度論』巻第四十六、「問曰。尸羅波羅蜜則總一切戒法。譬如大海總攝衆流。所謂不飲酒、不過中食、不杖加衆生等、是事十善中不摂。何以但説十善。答曰。仏総相説六波羅蜜、十善為総相戒。別相有無量戒。……以是故知説十善道、則摂一切戒。」(T25, p. 395, b18-29)を参照。

<sup>25</sup> 注19を参照。

<sup>26</sup> 『次第禪門』巻第一之下、「一有漏法者、謂十善、根本四禪、衆生縁四無量心、四空定。是所以者何。此十二門禪、体非観慧之法、不能照了断諸煩惱故。」(T46, p. 481, b9-12)を参照。

<sup>27</sup> 『次第禪門』巻第一之上、「一以息為禪門者、若因息摂心、則能通行心。……即是世間禪門、亦名出法摂心、此一往拋凡夫禪門。二以色為禪門者、如因不浄観等摂心、則能通行心。……即是出世間禪門、亦名滅法摂心、一往拋二乗禪門。三以心為禪門者、若用智慧反観心性、則能通行心。……是出世間上上禪門、亦名非出非滅法摂心、此一往拋菩薩禪門。以此義故、約三法為門。」(T46, p. 479, a25-b8)を参照。

別の箇所では、戒の種類として次の通り述べている。

問曰。分別定慧為四句可爾。戒復云何。

答曰。從十善、三帰、五戒、八斎戒、沙弥十戒、大比丘二百五十戒、菩薩十重四十八輕戒。（『次第禪門』卷第一之下、T46, p. 481, c12-15）

質問する。定と慧を区別して四句とするのはその通りであろう。戒はどうであろうか。

答える。十善から、三帰・五戒・八斎戒・沙弥の十戒・大比丘の二百五十戒・菩薩の十重四十八輕戒がある。

在家の三帰から出家比丘までの戒は、段階を踏んで挙げており、順序に意味があると考えられる。十善を三帰・五戒より前に置いているため、仏門に入る以前の実践と見なしていると言えよう。受戒儀式による得戒を説明した別の箇所<sup>28</sup>では、三帰・五戒、沙弥の十戒と挙げていくが、十善への言及はなく、儀式で受ける七衆の戒に含んでいない。

なお、智顗は諸著作において、『大品般若經』および『大智度論』における諸戒をまとめた十種戒の枠組みを用いて、小乗から大乘に至る戒の包摂を試みているが、『次第禪門』で論じた十種戒<sup>29</sup>において十善に言及することはない。

## （2）尸羅の解釈

大乘菩薩の戒について、次のような表現がある。

若菩薩戒者、衆生世世以来、或已遇善知識、發菩提心、受菩薩戒。但於生死中、顛倒造罪、妄失違犯。因今帰依三宝、重更練之、兼復懺悔清浄。用此本戒亦發禪定。是故雖無事戒、菩提本戒、或已有之。（『次第禪門』卷第二、T46, p. 487, a2-7）

菩薩戒については、衆生は何世にもわたって、場合によってはすでに善知識に出会って、菩提心を起こし、菩薩戒を受けている。ただし生死（輪廻）のなかで、顛倒して罪を造り、無思慮な過失によって〔菩薩戒に〕違犯している。いま三宝に帰依することによって、再びあらためてこれを精練し、また懺悔して清浄になる。この本（もとの）戒によって、禪定も発する。こういうわけで事戒（儀式で受ける戒）がないけれども、菩提に向かう本戒は、場合によってはすでにあ

<sup>28</sup> 『次第禪門』卷第二、「若約小乗、七衆發心、受戒作法不同故、得戒亦有優劣。如優婆塞優婆夷在家有五戒相。若本未入佛法男子女人、不殺父害母、不作逆罪、遇好良師教、帰依三宝、為受五戒作法成就、即五戒無作起、名得五戒。從此名清信士女。復次明沙弥有十戒相。……」（T46, p. 484, b14-20）を参照。

<sup>29</sup> 不欠戒、不破戒、不穿戒、無瑕戒、隨道戒、無著戒、智所讚戒、自在戒、具足戒、隨定戒。『次第禪門』卷第二（T46, p. 484, c18-p. 485, a5）を参照。

るのである。

菩薩の戒は過去世からあり、生死を繰り返す中で戒を犯すことがあっても、今世で懺悔すれば再び戒が清浄になるという。つまり、輪廻を超えて保持されるだけでなく、犯しても汚れるのみで失われることはない。この後では『大智度論』を引用し<sup>30</sup>、儀式による受戒の有無に関係なく存在するという尸羅によって菩提の本戒を説明している<sup>31</sup>。性戒の語こそ出ないが、大乘菩薩が本性としてもつ戒について、類似したものを想定している。

### (3) 三種の懺悔

卷第二では、懺悔・滅罪と尸羅の関わりを論じて、小乗の作法懺悔、大乘の観相懺悔と観無生懺悔の三種の懺悔<sup>32</sup>があると説く。第二の観相懺悔によって「体性の罪」を除くことができるとし<sup>33</sup>、『大智度論』の文<sup>34</sup>を引用する。もとの『大智度論』の内容を見れば、その罪とは十善戒を犯す罪であり、懺悔をしても三悪道の罪は除けないという、いわゆる性罪を指している。よって体性の罪とは、性罪とほぼ同義であろう。だが『次第禪門』は十善戒に言及していない。『大智度論』では十善戒を犯した罪は懺悔できないとしていたが、『次第禪門』では大乘の懺悔で体性の罪を滅することができるとし、智顗は大乘の懺悔の優位性を示している。

## 2. 『法界次第初門』

### (1) 十悪と十善

仏教の用語を解説する『法界次第初門』では、十悪<sup>35</sup>について十善との関係を説明し、現在・将来

<sup>30</sup> 『大智度論』卷第十三、「尸羅〔秦言性善〕、好行善道、不自放逸、是名尸羅。或受戒行善、或不受戒行善、皆名尸羅。尸羅者、略說身口律儀有八種。不惱害、不劫盜、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不飲酒。及淨命、是名戒相。」(T25, p. 153, b9-13)を参照。

<sup>31</sup> 『次第禪門』卷第二、「如摩訶衍論說、尸羅、秦言好善。好行善道、不自放逸、是名尸羅。或受戒行善、或不受戒行善、皆名尸羅。若不受戒行善名尸羅者、既有尸羅、豈不得發諸禪三昧耶。」(T46, p. 487, a7-10)を参照。

<sup>32</sup> 『次第禪門』卷第二、「今明懺悔方法、教門乃復衆多、取要論之、不過三種。一作法懺悔、此扶戒律、以明懺悔。二観相懺悔、此扶定法、以明懺悔。三観無生懺悔、此扶慧法、以明懺悔。此三種懺悔法、義通三藏摩訶衍、但從多為説。前一法多是小乗懺悔法、後二法多是大乗懺悔法。……」(T46, p. 485, b29-c6)を参照。

<sup>33</sup> 『次第禪門』卷第二、「罪有三品。一者違無作起障道罪、二者体性罪、三者無明煩惱根本罪。……二明観相懺悔者、破除体性惡業罪。故摩訶衍論云、若比丘犯殺生戒、雖復懺悔、得戒清浄、障道罪滅、而殺報不滅。此可以証前釈後。当知観相懺悔、用功既大、能除体性之罪。」(T46, p. 486, c4-12)を参照。

<sup>34</sup> 『大智度論』卷第四十六、「復次、戒律中戒、雖復細微、懺則清浄。犯十善戒、雖復懺悔、三惡道罪不除。如比丘殺畜生、雖復得悔、罪報猶不除。」(T25, p. 395, c12-15)を参照。

<sup>35</sup> 殺生・偷盜・邪婬の身業三つ、妄語・兩舌・惡口・綺語の口業四つ、貪欲・瞋恚・邪見の意業三つ。

にわたって悪が苦を招くことを知れば、人は悪をやめて善を行じ、清らかな楽果に至る、としている<sup>36</sup>。そして、さまざまな悪業はすべて十悪の中から出ているとし、十悪をあらゆる悪業の根本と定める<sup>37</sup>。

十善については「止の善」と「行の善」の二種によって論じているが<sup>38</sup>、戒と見なす表現はない。また、四諦の集諦について、不善業としての十不善、善業としての十善を、不動業としての十二門禪と並べて示している<sup>39</sup>。不善・善・不動は、『大智度論』において三界に位置づけられており<sup>40</sup>、『法界次第初門』においても十善を三界に置いていると言え、世間の有漏法として見ていると考えられる。

## (2) 三帰・五戒との関係

三帰を論じる際、十善との関係を次のように述べている。

次十善而辨三帰者、如来未興於世、爾時已有十善之化、是為世間旧善。豈有三宝之可帰。大聖初成正覺、方因提謂長者、開授三帰之戒。翻邪帰正、以為入聖之根本。……仏法以此三帰為本、通発一切戒品及諸出世善法。豈同十善之旧法耶。（『法界次第初門』卷上之下、T46, p. 670, b7-14）

十善の次に三帰を論じるとは、如来（釈尊）がまだ世に誕生していない時に、すでに十善による教化があった。これを世間の旧善とする。〔如来がいない時代に〕どうして帰依の対象となる三宝があるだろうか。大聖（釈尊）が初めて正覺を成就させて、提謂長者<sup>41</sup>をきっかけとして、三帰の戒を開き授けた。邪を翻して正に帰し、これを聖道に入る根本とした。……仏法はこの三帰を根本とし、通じて一切の戒品およびさまざまな出世間の善法を発する。どうして十善の旧法と同じだろうか。

十善が釈尊以前からあったため「世間の旧善」「旧法」と呼ぶ。『大智度論』では「旧戒」として

<sup>36</sup> 『法界次第初門』卷上之上、「次十悪而辨十善者、若人能知悪是乖理之行故、現在将来由斯招苦、則必須息悪行善、可以来世永致清升之楽果。」（T46, p. 669, c25-27）を参照。

<sup>37</sup> 『法界次第初門』卷上之上、「次此応出四重、五逆、七逆、謗方等經、用僧鬘物、作闍提行、十六悪律儀等。諸輕重悪業科目、皆從十悪中、離合分別而説者。」（T46, p. 669, c14-16）を参照。

<sup>38</sup> 『法界次第初門』卷上之上、「一不殺生。即是止善、止前殺生之悪。行善者当行放生之善也。二不偷盜。即是止善、止前盜他財物之悪。行善者当行布施之善。三不邪婬。即是止善、止前於非妻妾姪欲之悪。行善者当行恭敬之善。四不妄語。即是止善、止前虚言誑他之悪。行善者当行実語之善也。五不兩舌。即是止善、止前構闢兩邊之悪。行善者当行和合之善。六不惡口。即是止善、止前惡言加人之悪。行善者当行軟語之善。七不綺語。即是止善、止前綺側乖理之惡語。行善者当行有義語饒益之善。八不貪欲。即是止善、止前引取無厭之悪。行善者当行不淨觀觀諸六塵皆欺誑不淨之觀行善。九不瞋恚。即是止善、止前忿怒之悪。行善者当行慈忍之善。十不邪見。即是止善、止前撥正因果僻信邪心之悪。行善者当行正信帰心正道生智慧之善心。」（T46, p. 670, a5-26）を参照。

<sup>39</sup> 『法界次第初門』卷中之下、「集以招聚為義。若心与結業相応、未来定能招聚生死之苦。故名為集。集有三種業、攝一切業。一不善業、即十不善也。二善業、即十善也。三不動業、即十二門禪也。」（T46, p. 680, b13-16）を参照。

<sup>40</sup> 『大智度論』卷第八十八、「善名欲界中善法、喜樂果報。不善名憂悲苦惱果報。不動名生色無色界因縁業。」（T25, p. 681, b16-18）を参照。

<sup>41</sup> 波利と共に、成道した釈尊に、最初に供養して帰依した商人。

いたが、「戒」を「善」「法」に改めている<sup>42</sup>。また三帰を戒とし、聖道に入る根本と定め、一切の戒および出世間の善法の源とすることで、旧法である十善よりも重んじている。また五戒については「一切の大小乗の尸羅の根本」<sup>43</sup>とし、上記の三帰と合わせて、仏門に入る最初の三帰・五戒は、後に受ける大小乗の戒律および出世間の善法の根本となることを強調している。

別の箇所では、在家から出家に至る戒を列挙しているが<sup>44</sup>、十善には言及していない。

### (3) 尸羅の解釈

六波羅蜜の尸羅波羅蜜について、以下のように説明する。

尸羅、秦言好善。好行善道、不自放逸、是名尸羅。或受戒行善、或不受戒行善、皆名尸羅。尸羅略説有二種、一者在家尸羅、二者出家尸羅。在家尸羅者、所謂三帰、五戒、八斎戒也。二出家尸羅、所謂出家沙弥沙弥尼十戒、式叉摩那尼六法戒、大比丘比丘尼具足戒、乃至三千威儀、八万律行。若菩薩十重四十八輕、則通在家出家共戒也。若菩薩以質直清浄心、持如是等戒、皆名尸羅。(『法界次第初門』卷下之上、T46, p. 686, c6-15)

尸羅とは、秦(中国)では好善という。好んで善道を行じ、自ら放逸にならないことを、尸羅と名づける。戒を受けて善を行うのも、戒を受けずに善を行うのも、いずれも尸羅と名づける。尸羅は略して説くと二種があり、第一は在家の尸羅、第二は出家の尸羅である。在家の尸羅とは、いわゆる三帰、五戒、八斎戒である。第二に出家の尸羅は、いわゆる出家の沙弥・沙弥尼の十戒、式叉摩那尼の六法戒、大比丘・比丘尼の具足戒、ないし三千威儀、八万律行である。菩薩の十重四十八輕〔戒〕は、在家出家に共通の戒である。もし菩薩が質直で清浄な心によって、これらのような戒を持てば、すべて尸羅と名づける。

冒頭の尸羅の解釈は『大智度論』の文<sup>45</sup>とほぼ同じであるが、もとの『大智度論』にある身口の律儀の内容は踏襲せず、儀式で受ける在家と出家の戒などを列挙する。智顗の時代に、実際に用いていた戒を尸羅波羅蜜の中身に定めたと考えられるが、そこに十善を含んでいない。

<sup>42</sup> 十善を旧善とする表現は、吉蔵の『中観論疏』にも見られ、『大智度論』を出典として明示している。『中観論疏』卷第八(T42, p. 118, b14-16)を参照。

<sup>43</sup> 『法界次第初門』卷上之下、「五戒是一切大小乗尸羅根本。若犯五戒、則不得更受大小乗戒也。若能堅持、即是五大施也。此五通名戒者、以防止為義。能防惡律儀無作之非、止三業所起之惡、故名防止。」(T46, p. 670, c17-21)を参照。

<sup>44</sup> 『法界次第初門』卷上之下、「次此応明在家優婆塞優婆夷一日一夜八戒、出家沙弥沙弥尼十戒、式叉摩那尼六法戒、比丘比丘尼十種得戒、五篇七聚相、乃至菩薩十重四十八輕戒、及三千威儀、八万律儀。」(T46, p. 671, a16-20)を参照。

<sup>45</sup> 注30を参照。

### 3. 小結

智顗の前期時代における十善の位置づけは、有漏の法や世間の善道であり、旧善である一方、戒としては受容していない。三帰・五戒と区別し、それらよりも低いものとしている。とくに『法界次第初門』は、十善を釈尊以前の旧善であると強調し、仏教との関連づけを排しているかのようである。

『大智度論』において総相戒および旧戒として定めたこととは対照的である。このように『大智度論』の影響が強い前期の著作において、十善については『大智度論』を踏襲していないことが明らかとなった。

『法界次第初門』における尸羅の説明では、『大智度論』を引用しつつも、八種の戒相までは受け入れず、実際に戒として用いていたであろう小乗・大乘の諸戒を当てていた。ここに十善を含んでいないのは、戒と見なすほどの存在と意義がなかったためと考えられる。

また、大乘の戒として、「菩提の本戒」との表現で輪廻を超えて存在する戒に言及し、性戒に近い概念が前期にあったことが伺える。

## Ⅲ. 後期時代

智顗の後期の著作として、『維摩経』を注釈する『三観義』、『四教義』、『維摩経玄疏』、『維摩経文疏』といった著作群、および『摩訶止観』、『法華玄義』、『法華文句』の三大部を論じる。後期時代においては、三諦や三観、化法の四教、五味説といった思想が大成し、戒律を論じる際に用いる『大智度論』の十種戒の解釈においても、それらとの関連づけが行われている<sup>46</sup>。

晋王広の要請を受けて著した『維摩経』注釈書は、現行諸本の関係について研究が続いている。佐藤[1979:448]は、「現行の三大部が智顗の講説のままでなく、灌頂による再三再四の修治を経たものであるのに比べ、この維摩疏は何れも智顗の親撰か親撰に準ずる価値高い資料で、特に晩年時代における智顗の思想を研究するための、こよなき資料」と述べる。それに対し、平井俊栄[1985]は『維摩経文疏』、小野嶋祥雄[2009]は『三観義』、『四教義』、『維摩経玄疏』を対象として検討し、吉蔵(549-623)の著作を参照した可能性を指摘して智顗親撰説に疑義を呈している<sup>47</sup>。

三大部について、『法華文句』は587年<sup>48</sup>、『摩訶止観』は594年<sup>49</sup>の講説とされ、『法華玄義』に

<sup>46</sup> 『維摩経文疏』巻第九(X18, p. 523, c16-p. 524, a1)、『摩訶止観』巻第四上(T46, p. 37, a4-b27)、同巻第七上(T46, p. 92, a16-23)を参照。

<sup>47</sup> 平井俊栄[1985:95]は「智顗の親撰書として絶対視されている『維摩経疏』といえども、智顗の経典註疏の一般的な成立事情の埒外にあるものではない」、小野嶋祥雄[2009:56]は「『三観義』・『四教義』・『維摩経玄疏』にも灌頂の付加が加わっているという以上の検討結果から、『三観義』等を智顗の親撰とする佐藤博士の説に疑義を呈したい」と述べる。

<sup>48</sup> 『法華文句』巻第一上、「余二十七於金陵聽受、六十九於丹丘添削、留贈後賢、共期仏慧。」(T34, p. 1, b21-22)と灌頂が記した通り、二十七歳の時(587年)に講説を受けたとしている。

<sup>49</sup> 『摩訶止観』巻第一上、「智者、大隋開皇十四年四月二十六日、於荊州玉泉寺、一夏敷揚二時慈雲。」(T46, p.



ついて佐藤は593年の講説と推定する<sup>50</sup>。だが、灌頂（561-632）が記録した三大部は、聴記本からの整理を経て、現代に伝わる形でまとめられたのは智顗の死後である<sup>51</sup>。佐藤は、晩年の智顗が『維摩経』注釈書を記していた際、参照できる形で『摩訶止観』と『法華玄義』が存在しており（整理本）、その上で灌頂が修治して完成したのは、『法華玄義』（修治本）は597年から602年<sup>52</sup>、『摩訶止観』（再治本）は607年から632年<sup>53</sup>としている。佐藤の議論を発展させた平井は、『法華玄義』は605年までの成立とし<sup>54</sup>、吉蔵の『法華経』注釈書との関係が深い『法華文句』は灌頂の最晩年においてであるとしている<sup>55</sup>。

佐藤の研究に基づけば、講説・執筆の順こそ先に三大部、後に『維摩経』注釈書であるが、成立順は反対となる。『維摩経』注釈書にも灌頂の手が加わっているとの平井と小野嶋による指摘があるとはいえ、成立の事情に鑑みれば、三大部と同程度に再三再四の修治があったとまでは言えないであろう。

いずれにせよ、後期時代においても、『維摩経』注釈書と三大部の間で発展が見られる可能性がある。これまで智顗の戒律思想を論じるに際して『維摩経』注釈書を範囲とする研究はほとんどなく<sup>56</sup>、本論文で対象とすることで新しい視点を提示できるであろう。

## 1. 『三観義』『四教義』および『維摩経玄疏』

### （1）『三観義』

『三観義』は、『仁王般若経』で説く「十善の菩薩」<sup>57</sup>に触れるのみで<sup>58</sup>、十善を詳説していない。また、『維摩経』の文<sup>59</sup>を受けて十不善道について言及しており<sup>60</sup>、縁因仏性（縁因如来種）を解釈す

1, a7-9) を参照。

<sup>50</sup> 佐藤 [1979:338]。

<sup>51</sup> 佐藤 [1979] によれば、『法華玄義』は聴記本・整理本・修治本、『法華文句』は聴記本・修治本・丹丘添削本・天宝再治本の順番で成立した。『摩訶止観』については聴記本・整理本・修治本・再治本の順番であるとし、整理本・修治本は『円頓止観』との名であり、再治本に至って『摩訶止観』になったとする。灌頂の『観心論疏』には原初形態に近い『止観』が用いられており、また、日本の証真の著作にも現行本とは異なる『円頓止観』が引用されていることを指摘した。

<sup>52</sup> 佐藤 [1979:336]。

<sup>53</sup> 佐藤 [1979:398]。

<sup>54</sup> 平井 [1985:153]。

<sup>55</sup> 平井 [1985:156]。

<sup>56</sup> 張堂 [2016b] は「従来の円戒研究は『文疏』の戒観を完全に見逃して来たきらいがあり」と述べ、『維摩経』注釈書を対象に含めている。

<sup>57</sup> 『仏説仁王般若波羅蜜経』巻上、「十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。」(T08, p. 827, b14) を参照。

<sup>58</sup> 『三観義』巻下、「三明能運至者、行者即是不思議因縁衆生。理即是大乗也。因理即故、有名字。名字即、即是仮名發心。欲乘大乗、名觀行即。正乘大乗、欲出三界、乃至始出三界、名相似即。仁王経云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。」(X55, p. 682, a11-15) を参照。

<sup>59</sup> 『維摩詰所説経』巻中、「文殊師利言、有身為種、無明有愛為種、貪恚癡為種、四顛倒為種、五蓋為種、六入為種、七識処為種、八邪法為種、九惱処為種、十不善道為種。以要言之、六十二見及一切煩惱、皆是仏種。」(T14, p. 549, a29-b4) を参照。

る中で業道としての十不善を述べている。

## (2) 『四教義』

『四教義』においては、『涅槃經』で説かれる五行<sup>61</sup>のうちの嬰兒行を論じた内容があり、菩薩が五戒・十善などを実践し、また二百五十戒などを示すと説く<sup>62</sup>。嬰兒行は、幼児にたとえられる人天乗や小乗の小善の行を指す。実践として十善と五戒を並置していることは、小乗の戒の範疇に十善を収めていることが想定される。また、釈尊の出生時の物語に触れ、轉輪聖王の化導としての十善を示しているが<sup>63</sup>、これは在家の実践を指す。

このほかに『涅槃經』の戒聖行で説かれる諸戒を解釈した箇所<sup>64</sup>もあるが、具体的な戒相と関連づけることはなく、十善に言及することもない。

## (3) 『維摩經玄疏』

『維摩經玄疏』でも、十善については、『三觀義』と同様に『仁王般若經』の十善の菩薩について引用するのみである<sup>65</sup>。また、苦道・煩惱道・業道の三道を論じる中で、業道を十不善道で説明しているが<sup>66</sup>、これも『三觀義』と同じく『維摩經』の文を受けてのものである。

## 2. 『維摩經文疏』

『維摩經』は在家の維摩詰を中心とする經典であり、十善に触れる箇所が多いため、随文釈義である『維摩經文疏』でも、十善の解釈が多く行われている。

<sup>60</sup> 『三觀義』巻下、「經言、十不善道為種。即緣因如來種。緣因仏性之異名也。」(X55, p. 677, c2-3)を参照。

<sup>61</sup> 聖行、梵行、天行、嬰兒行、病行の五つの行い。『大般涅槃經』(南本)巻第十一、「爾時、仏告迦葉菩薩、善男子、菩薩摩訶薩當於是般涅槃經、專心思惟五種之行。何等為五。一者聖行、二者梵行、三者天行、四者嬰兒行、五者病行。善男子、菩薩摩訶薩當常修習是五種行。」(T12, p. 673, b22-26)を参照。

<sup>62</sup> 『四教義』巻第十、「和光利行、能令衆生、得見菩薩、同其始學。漸修五戒十善人天果報、三十三天楊葉之行。又示二百五十戒、觀練薰修禪、四諦十二因緣、三十七道品。」(T46, p. 758, c10-13)を参照。

<sup>63</sup> 『四教義』巻第七、「仙人答曰。吉無不祥。太子相好分明。其若在家、當作轉輪聖王飛行皇帝、王四天下、十善化世。其若出家、必成自然之仏、度脱万姓。」(T46, p. 746, a2-5)を参照。

<sup>64</sup> 『四教義』巻第九、「菩薩若不隨愛見破戒、即具五支諸戒。……菩薩善能護持諸戒、得入於初不動地。菩薩住不動地中、不動、不退、不墮、不散、是名菩薩修戒聖行。」(T46, p. 753, c11-21)を参照。

<sup>65</sup> 『維摩經玄疏』巻第四、「若得十信成就、即能見真諦理、斷界内見思、亦能見俗諦理、分別十法界、法心無謬亂、生相似中道之解、伏界外無明。故仁王經云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。法華經明意根清淨云、雖未得菩薩無漏智慧、而其意根清淨如此。」(T38, p. 541, a1-7)を参照。

<sup>66</sup> 『維摩經玄疏』巻第五、「三方便解脫即是業道者、文殊師利云、十不善道為種。此即緣因種、方便解脫之種也。種即是性。」(T38, p. 553, a16-18)を参照。

## （１）在家の戒

三帰・五戒から出家の律儀に至る戒を列挙した箇所では、「三帰、五戒、十善、八斎、出家律儀」<sup>67</sup>、「三帰、五戒、或八斎戒、或十善戒、或出家律儀戒、菩薩十重四十八輕戒」<sup>68</sup>と述べている。三帰から在家の戒を記し、出家へと至っていることから、十善を小乗の在家戒の一種として位置づけていることになる。後者は「十善戒」と表記し、戒であることを明示している。

また「五戒・十善」を解釈した箇所では、「五戒・十善は人天乗であり、四諦の理によって仏道に入る説ではない（五戒十善是人天乗、非是諦理入道之説）」<sup>69</sup>とし、五戒と十善を人天乗として同等に扱っている。

## （２）世間と四教

巻第七に、三種の菩提心の第一である「直心」を解釈して、世間・三蔵教・通教・別教・円教の五種の直心を述べる内容がある。世間の直心については「凡夫・外道の十善の直である」と述べ<sup>70</sup>、蔵・通・別・円の四教より低い世間の範囲で十善を捉えている。この文の後では、蔵・通・別・円の直心を語り、世間（凡夫）と四教の五つで論を進め、「この五つの直心は、四は権であり一は実である（此五直心、四権一実）」<sup>71</sup>として円教を実として示す。『維摩経文疏』では、こうして「世間（凡夫）と四教」という五つに分けて検討することが多い。

また、『維摩経』の「持戒は菩薩の浄土である。菩薩が成仏する時に、十善道を行じて、願いを満たした衆生がその国に生まれてくる（持戒は菩薩浄土。菩薩成仏時、行十善道、満願衆生来生其国）」<sup>72</sup>との文を解釈して、次のように述べる。

有五種。一者事相持戒、是凡夫也。次四種持戒、即是四教明四種正語正業正命、皆名持戒。具釈事繁、但知、前四是権戒、後一是実。菩薩自行教佗、隨喜讚歎後成仏時、五種十善満願衆生来生其国。十善即是正業正語正命也。斎教明願。以尸羅淨故、一切諸善得生、所求皆是果。故云、満願。歴四土来生。諸義類直心可知。（『維摩経文疏』巻第八、X18, p. 512, c11-17）

〔持戒には〕五種がある。第一は事相の持戒で、これは凡夫である。次に四種の持戒は、四教によって四種の正語・正業・正命を明かしているが、すべて持戒と名づける。くわしく解釈すれ

<sup>67</sup> 『維摩経文疏』巻第五（X18, p. 492, a2-3）を参照。

<sup>68</sup> 『維摩経文疏』巻第九（X18, p. 524, a5-7）を参照。

<sup>69</sup> 『維摩経文疏』巻第十二（X18, p. 546, b17-18）を参照。

<sup>70</sup> 『維摩経文疏』巻第七、「一世間直心者、如世人内懷実録、無有欺誑。即是直心。此乃凡夫外道十善之直。雖世間妄情謂為是直、理而言之猶詭曲。諺言痴直、即是其義也。」（X18, p. 510, a12-15）を参照。

<sup>71</sup> 『維摩経文疏』巻第七（X18, p. 510, a23）を参照。

<sup>72</sup> 『維摩詰所説経』巻上（T14, p. 538, b6-7）を参照。

ば事は繁多であるが、ただ前の四つ（凡夫・藏教・通教・別教）は権戒で、後の一つ（円教）は実であると知れ。菩薩は自ら行じて他の人を教化し、随喜し讃嘆した後で成仏する時に、五種の十善の満願の衆生がその国に來生する。十善は、とりもなおさず正業・正語・正命である。教について願を明かす。尸羅が清らかなので、一切の諸善は生じることができ、求めるものはすべて果たされる。よって、「願を満たす」と言う。四土をへて來生する。さまざまな意味は直心と同様に知るべきである。

經文の「持戒」について五種があり、事相の持戒である凡夫以外の四教の持戒は、それぞれの正語・正業・正命であると述べる。そして『維摩經』の原文で「行十善道」とあるのを、五種の十善の衆生と解釈し、十善は正業・正語・正命に他ならないとする。正語・正業・正命は持戒の意味であるから、ここで智顗は十善それ自体の意義を認めず、持戒の一表現として理解していることになる。なお、八正道を戒・定・慧に配して正語・正業・正命を戒とする考えは阿含經典から見られ<sup>73</sup>、『大智度論』でも説かれている<sup>74</sup>。

### （3）十種戒と十善

『大智度論』の十種戒を次のように論じ、十善との関係を示している。

淨名法身、住非持非犯、満足尸羅三徳之身、亦能方便十種戒藏摂諸毀禁。先以十善五戒、摂諸天人。次律儀、摂欠穿雜等四戒者。次以有作無生三正、謂正語正業正命、摂毀隨道戒、無著者。又以無量三正、摂聖所讃戒、自在戒者。又以無作三正、摂毀具足戒、隨定戒者。余人未得究竟非持非犯戒、皆名為毀戒也。（『維摩經文疏』卷第九、X18, p. 523, c16-22）

淨名（維摩詰）の法身は、〔戒の〕非持非犯に住して、尸羅の三徳の身を満足し、また方便の十種の戒藏によってさまざまな禁戒を破る者を摂することができる。まずは十善・五戒によってさまざまな天・人を摂する。次に律儀戒は、〔不〕欠・〔不〕穿・〔不〕雜などの四戒の者を摂する。次に有作・無生の三正、つまり正語・正業・正命によって、隨道戒・無著戒を破る者を摂する。また無量の三正によって、聖所讃戒・自在戒の者を摂する。また無作の三正によって、具足戒・隨定戒を破る者を摂する。他の人でまだ究竟の非持非犯の戒を得ていない者を、すべて戒を破ると名づける。

<sup>73</sup> 『中阿含經』卷第五十八、「法樂比丘尼答曰、非八支聖道摂三聚、三聚摂八支聖道。正語、正業、正命、此三道支聖戒聚所摂。……是謂非八支聖道摂三聚、三聚摂八支聖道。」（T01, p. 788, c8-14）を参照。

<sup>74</sup> 『大智度論』卷第十九、「戒者、正語、正業、正命。」（T25, p. 198, b10）を参照。

人天乗としての在家の十善を、十種戒の前に置いている。十種戒は後ろにあるほど高位であるため、十善・五戒は十種戒の枠組みにも入らない、低い位置づけである。

#### （４）三種の懺悔

『維摩經文疏』は、『次第禪門』と同じ三種の懺悔を論じ、性罪の位置づけを示している<sup>75</sup>。第二の観相懺悔で滅する罪について、『次第禪門』は「体性の罪」だったが、『維摩經文疏』では「性罪」とした<sup>76</sup>。性罪という語が後期に至って定着したと考えられる。『次第禪門』の項で検討した通り、『大智度論』で指摘された十善戒を犯した罪を、観相懺悔で滅する罪、すなわち性罪に当てていることは明らかである。だが『維摩經文疏』も、この解釈の中では十善戒に言及していない。

#### 3. 『摩訶止観』

『摩訶止観』では、『大智度論』の十種戒と関連づける形で、性戒の語が登場する。

列名者、經論出處甚多。且依積論、有十種戒。所謂不欠、不破、不穿、不雜、隨道、無著、智所讚、自在、隨定、具足。此十通用性戒為根本。大論云、性戒者、是尸羅、身口等八種。謂身三口四更加不飲酒、是淨命防意地。又云、十善是尸羅、仏不出世、世常有之、故名旧戒。（『摩訶止観』卷第四上、T46, p. 36, a14-20）

〔戒の〕名を列ねるとは、經や論に出處が極めて多い。しばらくは『積論（大智度論）』によると、十種戒がある。いわゆる不欠・不破・不穿・不雜・隨道・無著・智所讚・自在・隨定・具足である。この十は通じて性戒を根本とする。『大〔智度〕論』に、「性戒とは尸羅であり、身〔業〕・口〔業〕等の八種がある。身〔業〕三つ、口〔業〕四つにさらに不飲酒を加えたものであり、これが生活を清らかにして意地（意業）が乱れるのを防ぐ」<sup>77</sup>と言う。また、「十善は尸羅であり、仏が世に出現しなくても、世に常にあるので、旧戒と名づける」<sup>78</sup>と言う。

性戒を十種戒の根本と定めた上で、性戒の説明として尸羅に関する二つの『大智度論』の文を引用する。智顗は、尸羅という言葉を経を媒介にして、性戒と旧戒の十善を結びつけたことになる。ただし、

<sup>75</sup> 『維摩經文疏』卷第十五、「今明懺悔罪滅有三種。一作法懺、除滅違無作罪、此是毘尼明懺悔法也。二觀相懺悔、除滅性罪、此依定門明懺悔也。三觀無生懺悔、除滅妄想根本罪、此依慧門懺悔也。復次、違無作罪障戒、性罪障定、根本罪障慧。」（X18, p. 573, a17-21）を参照。

<sup>76</sup> 『維摩經文疏』卷第十五、「二觀相懺者、如諸大乘方等經所明行法、見罪滅相。菩薩戒云、懺悔若見光華種種好相、罪即得滅。若不見好相、雖懺無益。若見好相、非但違無作罪滅、性罪亦滅、而根本罪不滅也。取相心動、則心水不清、珠豈得現。此亦是擾其心也。」（X18, p. 573, b3-8）を参照。

<sup>77</sup> 注 30 を参照。

<sup>78</sup> 注 19 を参照。

『大智度論』にあるのは「性戒」ではなく「性善」である。

性戒については、重ねて次のように説明する。

性戒者、莫問受与不受、犯即是罪。受与不受、持即是善。……故知受得之戒与性戒有異也。故四分問遮法云、不犯辺罪不。辺罪即性罪也。此罪障優婆塞戒。何況大戒。（『摩訶止観』卷第四上、T46, p. 36, b6-13）

性戒とは、受けるか受けないかを問わず、犯せば罪になる。受けても受けなくても、持てば善になる。……よって受得の戒と性戒とは違いがあることが分かる。だから『四分〔律〕』の問遮法に、「辺罪を犯していないかどうか」<sup>79</sup>と言う。辺罪は性罪のことである。この罪は優婆塞戒を妨げる。ましてや大戒（比丘の戒）はなおさらである。

受得の戒と性戒の違いを述べているが、性戒は戒を受けても受けなくても犯せば罪になるとしており、受戒に関係なくもともと存在する戒である。性戒を犯した性罪は、在家戒も出家戒も妨げるため、性戒は受得の戒の基盤となるものである。一つ前に引用した文に戻れば、性戒も旧戒（十善）も、儀式によって戒を受ける・受けないに関わらず存在するという点で共通するため、尸羅という言葉で結びつけたと考えられる。

加えて『摩訶止観』では、性戒が清浄であることが戒波羅蜜の根本であり、解脱の最初の因であること、さらには性戒によって無作の受得の戒を得られるのであり、律儀戒・定共戒・道共戒は共通して性戒が根本であるとする<sup>80</sup>。さらに、『大智度論』の十種戒を論じた中では、性戒を四重禁と共に第一の不欠戒に当て<sup>81</sup>、十種戒の根本である性戒から不穿戒までは律儀戒と定めた<sup>82</sup>。

このほかに、業道としての十善<sup>83</sup>、人天乗の五戒・十善<sup>84</sup>、十善を束ねて五戒とする解釈<sup>85</sup>、『仁王般若経』の十善の菩薩の引用<sup>86</sup>などが見られる。

<sup>79</sup> 『四分律』卷第三十五、「白四羯磨当作如是問、汝不犯辺罪。」（T22, p. 814, c12-13）を参照。

<sup>80</sup> 『摩訶止観』卷第四上、「若性戒清浄、是戒度根本、解脱初因。因此性戒、得有無作受得之戒。……戒定道共通是戒名、説通以性戒為本。故経云、依因此戒、能生禪定及滅苦智慧、即此意也。」（T46, p. 36, b13-23）を参照。

<sup>81</sup> 『摩訶止観』卷第四上、「不欠戒者、即是持於性戒乃至四重。」（T46, p. 36, b24-25）を参照。

<sup>82</sup> 『摩訶止観』卷第四上、「東前三種戒、名律儀戒。秉善防惡、從初根本、乃至不穿、纖毫清浄、束名律儀戒。凡夫散心、悉能持得此戒也。」（T46, p. 36, c21-24）を参照。

<sup>83</sup> 『摩訶止観』卷第五上、「問。十境條然別不。答。四念処是陰別、觀空聚是入別、無我是界別、五停心煩惱別、八念病別、十善業別、五繫魔別、六妙門禪別、道品見別、無常苦空慢別、四諦十二縁二乘別、六度菩薩別。」（T46, p. 51, b15-19）を参照。

<sup>84</sup> 『摩訶止観』卷第五上、「三善表樂為相、定善聚為性、升出色心為体、樂受為力、起五戒十善為作、白業為因、善愛取為縁、善習果為果、人天有為報、応就仮名初後相在為等也。」（T46, p. 53, c10-13）を参照。

<sup>85</sup> 『摩訶止観』卷六上、「束於十善、即是五戒。深知五常五行義、亦似五戒。」（T46, p. 77, b3-4）を参照。

<sup>86</sup> 『摩訶止観』卷第七下、「如此次第進慧定陀羅尼戒護廻向願等十信具足、名六根清浄相似之位、四住已尽。仁王般若云、十善菩薩發大心、長別三界苦輪海。即此意也。」（T46, p. 99, a22-26）を参照。

#### 4. 『法華玄義』

『法華玄義』では、『涅槃經』で説かれた大乘の出家菩薩の諸戒について詳しく論じている。白四羯磨で性重戒と息世譏嫌戒が具わり、それらを等しく持つことによって、五支の戒<sup>87</sup>（自行の五支）が具わる。その第一の根本業清浄戒に十善を当てている。

根本者、十善性戒、衆戒根本。為無漏心持、故言清浄。（『法華玄義』卷第三下、T33, p. 716, c28-29）

根本〔業清浄戒〕とは、十善性戒であり、さまざまな戒の根本である。無漏の心によって持つことができるので、清浄と言う。

無漏の心によって持つ十善性戒は、有漏の法としての十善とは異なり、またさまざまな戒の根本であると定めている。

なお、他の四つの戒のうち前後眷属余清浄戒は、波羅提木叉の七聚<sup>88</sup>のうち第三に重い罪である偷蘭遮などを前眷属、第二に重い僧残などを後眷属とする。四重禁以外の律の内容がこの戒に含まれることから、白四羯磨で先に具わる性重戒の内容は四重禁であることが想定され、『涅槃經』の内容<sup>89</sup>と合致する。よって性重戒と（十善）性戒を別の物と見ていることになる。

さらに、根本業清浄戒と前後眷属余清浄戒は、律儀に属し、受戒の儀式によって直接得られるが、後の三つは、受戒の儀式で得る律儀戒ではないとする<sup>90</sup>。ここで、十善性戒を律儀戒に含めたことになる。

また『法華玄義』では、十善については、人名を出していないが劉虬（437-495）の教判である五時七階説<sup>91</sup>に触れ、第一時の五戒十善人天教門を紹介している。だが解釈に際しては十善に言及していない<sup>92</sup>。ほかに、五戒と切り離して天乗に限定した十善<sup>93</sup>、善道としての十善<sup>94</sup>の解釈も見られる。

<sup>87</sup> 根本業清浄戒、前後眷属余清浄戒、非諸惡覺清浄戒、護持正念念清浄戒、廻向具足無上道戒。

<sup>88</sup> 具足戒の条目（波羅提木叉）の分類方法に、五篇や七聚がある。五篇は、波羅夷（四重禁）、僧残、波逸提、波羅提舍尼、突吉羅。七聚は波羅夷（四重禁）、僧残、偷蘭遮、波逸提、波羅提舍尼、突吉羅、惡説。

<sup>89</sup> 『大般涅槃經』（南本）卷第十一、「有二種戒、一者性重戒、二者息世譏嫌戒。性重戒者、謂四禁也。」（T12, p. 674, b4-5）を参照。

<sup>90</sup> 『法華玄義』卷第三下、「此兩支属律儀、作法受得之戒也。後三支、非作法、是得法。得法時乃発斯戒也。」（T33, p. 717, a4-5）を参照。

<sup>91</sup> 『大乘義章』卷第一、「晋武都山隠士劉虬説言、如来一化所説、無出頓漸。華嚴等經、是其頓教。余名為漸。漸中有其五時七階。言五時者、一仏初成道、為提謂等、説五戒十善人天教門。……」（T44, p. 465, a11-15）を参照。

<sup>92</sup> 『法華玄義』卷第十下、「人言漸教中有七階五時。言仏初成道、為提謂波利、説五戒十善人天教門。然仏随衆生、宜聞便説、何得唯局初時為二人説五戒也。……初説五戒時、未化陳如、与誰接次而名為漸。」（T33, p. 812, c17-26）を参照。

<sup>93</sup> 『法華玄義』卷第六下、「若修持十善、任運無間、善心成熟即天業。」（T33, p. 759, c3-4）を参照。

<sup>94</sup> 『法華玄義』卷第四上、「不為不浄、作十惡業。慚愧羞鄙、行三品十善、感三善道生。」（T33, p. 720, c21-22）を参照。

## 5. 『法華文句』

『法華文句』では、戒を詳細に論じる箇所はなく、十善も同様である。戒を列挙した際に「三帰、五戒、十善、八齋、出家律儀」<sup>95</sup>としているのは『維摩經文疏』と同様であり、十善を在家の戒に当てている。ほかの箇所でも「十善戒」<sup>96</sup>の語が見える。

また、業道としての十善<sup>97</sup>、天乘としての十善<sup>98</sup>のほか、十善を六波羅蜜に分類する議論<sup>99</sup>もある。

## 6. 小結

後期の著作における十善は、業道および世間の善道と共に、戒として受容している表現が散見する。「五戒・十善」というように小乗の在家の戒として捉えている内容はあるが、在家が儀式において受ける戒として十善が示されることはない。人・天に生まれるための善道の延長として、五戒と同等の実践、いわば広義の戒として捉えているためと考えられる。『法華玄義』や『法華文句』では、天乘に限定した十善の表現も見られる。

後期時代の特徴は、十善が性戒および律儀戒として論じられていることである。十善を性戒として言及した『摩訶止観』、十善性戒と記した『法華玄義』において、さまざまな戒の基盤であると強調した。

なお、十善と性戒に関連づける内容は、瑜伽行派の経典<sup>100</sup>などにも見られるが、具体的に十善を「性戒」と記述するものはない。その点で、十善をそのまま「性戒」としたのは『摩訶止観』、『法華玄義』の独創であると考えられる。

一方、この十善の特徴は、『維摩經』注釈書にはない。『維摩經文疏』では、五戒などと並ぶ十善戒として、また世間の善道として言及し、十種戒の枠外の低位に置く。だが『摩訶止観』と『法華玄義』では性戒としての十善が登場し、律儀戒であり、諸戒の基本であり、かつ十種戒の枠内に収めた。

<sup>95</sup> 『法華文句』卷第二下 (T34, p. 26, a20) を参照。

<sup>96</sup> 『法華文句』卷第六上、「踰踞土埵者、修十善戒能生六天、六天是欲界高处、事如土埵也。」(T34, p. 75, c27-28) を参照。

<sup>97</sup> 『法華文句』卷第三下、「引導衆生令離諸著者、說散十善離三途著、說淨十善離欲界著、說三藏離見思著、說菩薩法離涅槃著、說佛法離順道法愛著。」(T34, p. 41, b28-c2) を参照。

<sup>98</sup> 『法華文句』卷第七上、「五乘者、五戒乘出三途苦、十善乘出人道八苦、声聞乘出三界無常苦、緣覺乘出從他聞法苦、菩薩乘出内無利智外無相好苦、是為五乘。」(T34, p. 93, c13-16) を参照。

<sup>99</sup> 『法華文句』卷第八下、「若束十善為六者、不殺至不妄語是檀、不兩舌是尸、不惡口是忍、不綺語是進、不貪瞋是禪、不邪見是般若。」(T34, p. 115, b11-13) を参照。

<sup>100</sup> 『菩薩地持經』卷第九、「如是淨心滿足、次第入增上戒住。入增上戒住已、性戒具足轉邪業迹、所撰惡戒一切不行。況復中上。如是性戒具足、染汚不染汚業、善趣惡趣業迹、因處果處如實知、報果依果及彼業如實知。自斷十惡行十善業、復以此法教授衆生。……」(T30, p. 942, a3-8) を参照。



#### IV. 結語

智顗は、戒が清らかであってはいじめて修行が成就するという点において前期も後期も一貫している。その上で、十善の受容では諸著作において差異が見られた。主な特徴をまとめると次の表の通りである。

【表】諸著作における十善の受容

		世間の善道	小乗の在家の戒	性戒	律儀戒
前期	次第禪門	有漏の法			
	法界次第初門	世間の旧善			
後期	四教義	転輪聖王の化導	五戒・十善		
	維摩經文疏	世間の人天乗	五戒・十善、十善戒		
	摩訶止観	人天乗	五戒・十善	性戒は尸羅 十善は尸羅	律儀戒
	法華玄義	天乗	五戒・十善	十善性戒	律儀戒

十善を戒とするか否かについて、前期においては、十善は有漏の法・世間の善道であって、戒と見なす表現はなく、三帰・五戒より低い位置づけであった。『大智度論』を引用しながらも、十善を戒とした内容までは取り込まなかったのが前期の特徴である。

後期においては「五戒・十善」という表記のように、十善を人天乗の在家戒とするような表現が現れ、「十善戒」という語も見られた。

性戒との関連については、前期に明示されなかった性戒への言及が『摩訶止観』、『法華玄義』に現れ、それが十善であると論じられた。その比較として分かりやすいのは、各著作における『大智度論』の尸羅の引用態度である。前期においては『大智度論』を引用しても、尸羅と十善を結びつける議論に踏み込まなかったところを、『摩訶止観』では尸羅を媒介として十善（旧戒）と性戒を結びつけた。

そして、十善を性戒および律儀戒とし、諸戒の基盤であり、解脱の初因として受容する様相は、三大部において示され、『維摩経』注釈書には見られない。十種戒との関係で見ても、『維摩経文疏』では十善を十種戒の外の低位に置いたが、『摩訶止観』では性戒を十種戒の根本とし、かつ不欠戒に収めた。

以上のことから、十善の位置づけについて、前期の著作、『維摩経』注釈書、三大部という三つの分類で、内容が分かれることが明らかとなった。

智顗の講説・執筆で言えば、前期著作、三大部、『維摩経』注釈書という順であり、思想の展開があればその順で捉えられるのが自然である。前期から後期への発展と言える戒としての受容は、前期に見られた業道の延長上にあると言え、世間の善道である十善を在家の実践項目と捉えれば、「五戒・十善」として並び称するような展開は可能であろう。

一方、『維摩経』注釈書と三大部の間にある差異を考えると、講説順に従って、性戒・諸戒の基盤・解脱の初因として重視した三大部から、世間の善道・在家戒として低位に置いた『維摩経』注釈書へという変遷は、理解しがたい。また、『摩訶止観』、『法華玄義』と『維摩経』注釈書は同じ後期時代に属し、説時でいえば、最晩年における四年程度の開きしかない。その間に、三大部から『維摩経』注釈書へと十善の捉え方が後退するような展開は考えにくい。

こうした観点から、十善および性戒に関する限りは、前期著作、『維摩経』注釈書、三大部という順で思想が展開していると考えるのが妥当ではないだろうか。そして、この差異をもたらした背景は、成立の事情に鑑みれば、灌頂の手による修治の影響も考えられよう。とくに、三大部は完成までにいくつかの整理・修治の段階を経ているため、この点については、さらなる検討が必要である。また、十善を律儀戒とした点については、律儀戒の解釈自体が前期時代から変化している可能性があり、稿を改めて考察したい。

## 参考文献

- 安藤俊雄 1968『天台学 根本思想とその展開』平楽寺書店
- 池田魯参 1995-1997『詳解 摩訶止観』天巻・地巻・人巻、大蔵出版
- 阿純章 2004a「天台智顗における菩薩戒思想の形成」『東洋の思想と宗教』21: 44-68
- 阿純章 2004b「天台智顗の菩薩戒一大乗戒と小乗戒に対する見方を中心に一」『天台学報』46: 75-82
- 小野嶋祥雄 2009「「天台維摩疏」智顗親撰説への疑義—吉蔵撰述書との比較を通して—」『岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要』9: 33-60
- 勝野隆広 2000「天台における戒—その基本的理解—」『天台学報』42: 64-70
- 菅野博史訳註 1995『法華玄義』上・中・下、第三文明社
- 菅野博史訳註 2007-2011『法華文句』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、第三文明社
- 小寺文頼 1965「天台大師の梵網経観」『叡山学報』24: 119-127
- 佐藤達玄 1986『中国仏教における戒律の研究』木耳社
- 佐藤哲英 (1961) 1979『天台大師の研究—智顗の著作に関する基礎的研究—』百華苑
- 島地大等 (1933) 1976『天台教学史』仏教書林中山書房

関口真大校注 1966『摩訶止観一禅の思想原理一』上・下、岩波書店

張堂興昭 2012「天台大師の戒観と伝教大師の「仮受小戒」説—その思想的接点から見える若干の問題—」『天台学報』54、71-80

張堂興昭 2014「法華制と十善戒—最澄の十善戒受容をめぐって—」『印度学仏教学研究』62(2)：98-102

張堂興昭 2016a「最澄と『文句』『止観』所説の「十善戒」」『天台学報』58：83-92

張堂興昭 2016b「授菩薩戒の戒相をめぐって—智顗と円仁を中心に—」天台宗教学大会発表資料

土橋秀高 1967「大乘戒と小乗戒」『日本仏教学会年報』32：112-128

土橋秀高 1980『戒律の研究』永田文昌堂

利根川浩行 1974「天台戒疏の十戒」『印度学仏教学研究』23(1)：170-171

中村元 1971「十善の成立」『印度学仏教学研究』19(2)：9-14

平井俊栄 1985『法華文句の成立に関する研究』春秋社

平川彰 1960「大乘戒と十善道」『印度学仏教学研究』8(2)：280-287

平川彰 1968「初期大乘仏教の戒学としての十善道」芳村修基編『仏教教団の研究』百華苑、167-203

平川彰 1976「智顗の戒体論について」『仏教思想論集 奥田慈応先生喜寿記念』平楽寺書店、755-768

平川彰 1997「智顗における声聞戒と菩薩戒」『天台大師千四百年御遠忌記念 天台大師研究』天台学会、1-25

福島光哉 1980「天台智顗における大乘戒の組織と止観」『大谷学報』60(2)：1-12

福島光哉 1981「智顗の戒律思想—性罪をめぐる問題について—」佐々木教悟編『戒律思想の研究』平楽寺書店、343-365

藤尾和世 1995「天台智顗の性戒説について」『印度学仏教学研究』44(1)：49-51

前田崇 1995「天台大師における三聚浄戒」『天台学報』37：19-25

村上明也 2009「『菩薩戒義疏』の天台大師説を疑う」『印度学仏教学研究』57(2)：218-221

村上明也 2017「智顗説灌頂記『菩薩戒義疏』の成立に関する研究」『法華仏教研究』25：106-156

由木義文 1973「智顗における戒の問題」『印度学仏教学研究』22(1)：296-300